

2012年
6月7日
木曜日

井口 泰 教授 (労働経済論)

「あなたに必要なリーダーシップ」

「リント人への第Iの手紙 2・12-16」

関学では、スクールモットーである「Mastery for service」を語るときに、長年、リーダーシップの問題を避けてきたように思います。最近、文部科学省の「グローバル人材」と、関学の「世界市民」を並べて掲げる文書で、リーダーシップという言葉が登場するようになりました。

しかし、関学生のほとんどは、大学でリーダーシップについて考える機会はなく、まして、「リーダーシップ・トレーニング」を受ける機会もありません。それに対する反論は、「リーダーシップなどというものは、教えれば身に就くものではない」というものです。しかし、「リーダーシップ・トレーニング」がきっかけとなり、自分なりのリーダーシップを発見する場合も少なくありません。

2008年秋以来、欧米経済の停滞のなかで、新興国経済が台頭しています。そうしたなかで日本は、急速に発展する中国やインドなど新興

国とも対等に付き合ひ、協力する関係を築くことが不可欠です。

ところが、最近公表された、アジア展開する日系企業の日本人社員のマネジメント能力に関する調査結果は衝撃的です。日本人トップや管理職の多くは、本社とのパイプ役又は調整役にとどまり、現地従業員から、説得力や信頼性に欠けていると評価されているからです。

実は、リーダーシップを根底で支えているのは、「なぜ」や「何のために」を徹底的に問う精神です。日本語人だけの日本語の論理で決め、目的も論理も明示せず、ただ従えという感覚では、言語、文化や価値観の異なる人々が構成する組織を牽引することが困難です。

多くの日本人は、中学・高校ばかりか大学でも、「受動型」授業に従順に参加するのが普通で、自分で問を立て自分で答を出す「探究型」の授業は例外的です。

そもそも学生の皆さんは、大学に

入った目的を問い直す必要がありません。現代の大学は、就職や出世など、経済的成功のための手段に化していません。しかし、アメリカの「アイビリーグ」(ハーバード、イエール、プリンストンなど)など、リベラルアーツを重視する大学の伝統によれば、大学とは人生の目的や価値、意味を探索する場所なのです。

イエール大学の卒業式の資料には、卒業生が大学で何を学んだかが率直に綴られています。それは、探究する情熱であることが判ります(『In love with study, study with passion』)。これら大学の卒業生が、その後、経済的にも成功している例は少なくありません。しかし大事なものは、高い所得や地位と同時に、高い責任感と実行力も求められる点です。これを可能にするのが、探究に心を燃やす能力です。

最近、世界中で「幸福研究」が盛んになっています。そこでも、経済的利益だけを追求した人は、社会貢

献を追求した人に比べ、結果的に幸福度は低いという結果がでていのも、興味深いことです。

本日の聖書の箇所には、「わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。」と書かれています。「霊」という言葉は、何か神秘主義的で、科学的な説明を許しません。そのような用語法が、現代人の聖書に対する拒否反応を生むのなら、それは、「クリスチャンの無策が原因です。霊を賜る」というのは、私の言葉で言い換えれば、人生に目的又は価値あるいは意味を与えるものを探究するパッションを持つことです。自分の生きる意味や価値を自問し、これを積み重ねながら生きることこそ、あなたのリーダーシップの源泉であり、それが、新しいイニシアチブを生み、組織や社会を変える力になるでしょう。